

【佳作】

モノとカガチ

日向野 秋穂（埼玉県 筑波大学附属坂戸高等学校 3年生）

「いいかい。一人目はカガチ、二人目はモノ。だれかを受け入れるときは安易に受け入れちゃ駄目だ。よく見て、よく考えて、そいつがどんな奴なのかを自分で分析するんだよ。じゃないと痛い目に合うからね。」

四才くらいの時、よく祖母にこんなことを言われた。祖母いわく、カガチはヘビのことで、ヘビは昔から生と死の象徴として宗教的に崇められていたという。一方モノとはオニのことで、いろいろな言い伝えがあるらしいが、仮面をかぶった死者の霊、いわゆる成仏出来なかった霊が人間という仮面をかぶっているという。成仏できない霊なんて、幽霊そのものだし、幽霊はみんな恨みや後悔を持っているように思う。なぜ祖母がこんな話をしていったのかなんて、僕にはよくわからなかったが、今思うと祖母は他人に神経質というか、警戒心が強いというか。

そう思うのも仕方がないとは思う。祖母は幼少期を第二次世界大戦の真っただ中で過ごし、何年か後の米国旅行中、テロに遭遇するなど多くの不幸に見舞われた。故に人間が引き起こした争いを嫌悪し人間不信となってしまうた。

そんな祖母には唯一心を許す人がいた。祖母の夫、すなわち僕

の祖父だ。祖父は祖母と違い明るく社交的な人柄で、町内会では会長を務めたほど周りから親しまれていた。祖母は祖父といるときだけ、笑顔で美しい女性の顔をしていた。

しかし年月が経つにつれ祖父の体は弱ってきて、とうとう入院する事になった。祖母は祖父の世話を毎日欠かさず行っていた。ある日、僕が六才になったとき、祖父が入院している病院から祖父の病状が急に悪化したという電話が祖母にかかってきた。僕は急いで祖母と母と病院へ駆けつけるとそこにはやせ細った真っ白な祖父がいた。二日前会ったときよりもだいぶ具合が悪そうに見えた。そのとき祖父の隣にいた医師は医師としての気丈な態度ではなく、なぜか申し訳なさそうな表情をしていた。僕は何かを感じていた。その後まもなく祖父は亡くなった。僕は祖母はきつとすごく悲しむだろうと思っていた。しかし祖母は涙すら流していなかった。悲しみよりもまるで何かにとりつかれたような虚しさを感じるほどの無表情だった。

「私は何も信じない。」
それを言ったとき、祖母は何も言わなかった。その時の僕にはわからなかった。医師の表情も祖母の言葉の意味も。

「よつ、亜樹。昨日の恐怖体験シヨウ観たか？あのヘビの話はまだで背筋にビビッと来たぜ。」

「おはよう有希。いや観てないよ。どうせテレビ用に作られた話だろ。」

「それでもおもしろきゃいいじゃねえかよ。ったく亜樹はいつもしみてたれてるよな。」

有希とは市内の高校に一緒に入学し、よく朝も一緒に登校する。有希は僕とは違って、一八〇センチくらいの筋肉マッチョな体形

だ。クラスのみんなが友達、と言えるほど有希は人と仲良くすることが得意で、何事にもポジティブな性格だ。一方僕は冷めているせいかみんなが友達と言えるほどフレンドリーではない。

僕たちは今年で高校三年生になる。大学受験も控えている大事な年だ。にも関わらずのんきにテレビを観ているなんて、と有希に一瞥をくれながら言うのと、有希は少し黄ばんだ歯を出してにいつと笑った。

「全く亜樹は真面目すぎるぜ。少しはメディアに目を向けてみるって。意外と役に立つこともあるんだぜ。」

「有希が観てるのは役に立つどころか、嘘じゃないか。テレビを観る時間もそのメディアから得た知識も全部無駄だよ。」

「ったく、相変わらずの現実主義っぷりだな。」

有希とは幼馴染で、小学校から今までずっと一緒である。故に僕のこんな性格も彼にとっては慣れっこなのだ。有希は母子家庭で育つたため、有希の母が夜勤で留守の時はよく僕の家で寝泊まりしていた。僕の母も父も有希の好青年さに好意を抱いており、今でもよくうちに泊まることがある。

「そういうや、お前のばあちゃん元気が？最近見てねえからよお。」
有希は僕の祖母とも面識があった。祖母は有希に対してでもそけない態度でいたが、有希はそんなことを微塵も気にせず前向きに接していた。

有希と僕の家は向かい合わせで、僕の祖母の家は西側の丘をつ越えたところにある。故に子供のころは祖母の家の近くの大きな公園で遊び、時々祖母の家にも訪ねていた。

「おばあちゃんは多分元氣だよ。最近は勉強が忙しくて会ってないんだ。」

「そうなのか。高齢者が一人暮らしなんて今の時代あぶねえから、

たまに見に行つてやれよな。」

余計なお世話だ、と内心思いつつ、有希が祖母に対しての前向きな態度の中に少し苦手意識を持っていることを知っていた。でもたまに祖母の話題を出すことがあって、なんでわざわざ気にかけてのだろうと考えても、結果は彼の明るい性格がそうしているとしたか考えられなかった。

キーンコーンコーン

授業の終わりを告げるチャイムが校内に鳴り響き、僕は帰宅の準備を始めた。有希は委員会の仕事があるらしく先に帰るように言われた。僕はもう部活を引退しており、受験勉強のための学習塾にも特に通っていないので、そのまま日も家へ直帰する予定だった。が、有希に祖母の話をされ、一日中頭の片隅に残っていたので、祖母の家へ寄ることにした。

もう春だというのに僕の地域は長袖を着ても寒いと感じるくらいの気温で、僕は制服の上にとったアウターの袖をぐいっとのばした。自宅を通りすぎ、西側の丘を登ろうとしたとき、突然吹雪のような冷たさを持った風が吹いた。そのとき僕はなぜか恐怖を感じていた。自分が今薄暗いお墓に一人にいるような気分だった。丘を越え、祖母の家に着くと、いつもと違うことに気づいた。祖母の家にはかつて庭があり、たくさんのきれいな花が咲いていた。四季折々の花が凛としていた。しかし、今のそこはまるで空き巣に遭ったように、荒れ地と化しており、花は茶色く枯れ、根元からぐったりしている様子だった。庭の象徴として咲いていた一輪のユリでさえ、原型をとどめていなかった。僕はいつから祖母の家に来ていないか覚えていなかったが、どんな時期に來ても、ここまでひどい状況になっていたことはなかった。僕は

背筋にびりりっとスタンガンを撃ち込まれたような衝撃が走り、とっさに祖母の家に駆けこんだ。玄関の戸を勢いよく開け、いつもはきちんとそろえる靴を思い切り脱ぎ捨て、祖母がいつもいたリビングへ一目散に駆けつけた。パンツと扉を押すと、そこには祖母がいた。確かに祖母はいた。リビングの真ん中にある丸机のそばに座り、遠くの方を見つめる、前と変わらない彼女がいた。でも僕はなぜかそれに違和感を覚えた。

「やあ、亜樹。どうしたんだいそんなに急いで。びっくりしたじゃないか。」

祖母は亜樹の方にゆっくりと顔を向け、にっこりと口角を上げた。祖母はこんなことはしなかった。僕が来ても、はじめは嫌な顔をしてだんだんと口数が多くなった。今日みたいになににっこりと、まるで普通のおばあちゃんのような素振りをするこゝとなんてなかった。だって彼女は周りとふれあうことを嫌っていたから。

もっと彼女を観察すると、彼女の周りはやけにモヤがかかっているかのように白く感じた。本当に白いかはわからなかった。僕は警戒心を持ち、恐る恐る話しかけた。

「ああ、久しぶり。ごめんね、急に押しかけて。」

「大丈夫だよ。あ、何か飲むかい？」

まただ。祖母は僕に対しても初めから、お茶を勧めるような人ではなかった。というか初めから考えておかしかった。庭が荒れ果て、玄関の鍵が開いていて、にっこりと微笑み、彼女の周りが白く見え、お茶を勧める。僕の祖母には当てはまらないことだ。

祖母はゆっくりと立ち上がると、お勝手の方へ行き、お茶の準備を始めた。その行為を隠れ見ながら冷静に分析した。僕の目の前のヒトは誰だということか。祖母の仮面をかぶった誰かか。そ

したら祖母は今どこにいるのか。まさか誘拐されたりしているのか。しかしここまで完成度の高い仮面を用意するのは難しいだろう。そうぐるぐると思いをはせていると、祖母が目の前にお茶を出した。

「最近会ってないうちに、大きくなったんだね。まるでおじいさんのように丈夫になって。」

おじいさんの話なんて、絶対にしないことはわかっていた。なのにそれをするなんて。僕はだんだん恐怖を感じていた。

「ねえ、おばあちゃん。どうして庭の花とかあんなに枯れちゃったの？前はきれいに咲いていたよね？」

我ながら、冷静さを保っていると思うが、声はかすかにふるえていた。

「それはね、もうこんな年になって、庭の手入れをするのにも一苦労でさ。放置していたらあんなってしまったんだよ。」

祖母は少し焦って答えたように見えた。

僕には祖母が手入れをしなくても、祖父から贈られたあのユリだけは枯らさないことはわかっていて。しかしそれすら元の姿を想像できないほどまでにしおれていたのだ。自分の加齢を理由に枯らす人ではない、僕は確信した。

「ところで、亜樹。昔よく私が話したこと覚えてるかい？」

急に話題を変えた祖母にさらなる疑問を持ちつつ、答えた。

「あの、モノとカガチの話のこと？」

「そうだ。亜樹は記憶力がいいからよく覚えていたね。今になってもあの話は忘れてはならないよ。高校生になったみたいだけど、ちゃんとね。」

なぜ今そのことを話したのだろうか。僕はますますわからなく

なった。祖母はそれを言ったきり、何も言わなくなった。

次の日から、僕は毎日祖母の家に行った。違和感を明らかにするために。祖母は相変わらず不自然に丸つくえのそばに座り、お茶をすすっていた。白いモヤのようなものも変わらず祖母の周りを覆っていた。そして他愛のない会話をした後、必ずモノとカガチの話をした。僕はいろいろな疑問に思っていることを聞けばよかったのに、なかなか聞けなかった。

違和感を覚えてから二週間が経ったある日、珍しく有希が学校を休んだ。有希のお母さんによると、風邪をひいたと言っていたが、有希はいつも皆勤賞をもらうほど学校を休むことなんてなかったで、僕は珍しいこともあるんだなと感じていた。その日も僕は祖母の家へ行くために西側の丘を登った。そして彼女の家に着き、入り口の庭に入ろうとすると急にとげとげしい何かを脳に感じた。なんとというか、言葉では表せないような、脳内にびりびりと電流が走るような、そんな気を感じていた。久しぶりに会った祖母に違和感を覚えていたものとはまた異なるが、変わらずこちらにも恐怖を感じるような類だった。僕は慎重に祖母の玄関の戸を開けた。音をたてないようにゆっくりひっそりと。中から声が聞こえた。一人は祖母だと確信した。しわがれた人を疑うような強気な声だ。もう一人は誰だろう。よく聞こえなかったが男性であることはわかった。僕はリビングにつながる廊下をおそるおそる歩き、少し開いていたリビングの戸を思い切り押しした。

「誰だー！」

とっさに叫んだ僕の目に映ったのは、信じられない光景だった。そこには有希がいたのだ。いや、あれを有希と言っているのか。

顔にはところどころ鱗のようなものがついており、瞳孔は縦長で、体格や顔のパーツに大きな変化がなかったとしても、その姿はまるでヘビのようだった。着ている服もいつもの制服ではなく、白と水色の和服のようなものを全身にまとい、懐には刀のようなものを持っていた。

祖母の方にも変化があった。祖母は外見に大きな変化はなかったが、顔に二本の角がチョココンと生えていた。そしてなぜか悲しげな表情をしていた。

僕は今自分が何を見ているのか、わからなかった。あまりの衝撃にその場で膝をつき、限界まで目を見開いていた。

「見られてしまったか。まあ良い。ぼちぼち潮時と考えていたからな。かくして、亜樹、どのようにしてここに入ってきた。私は一応結界を張っていたんだが。」

有希は淡々と、そして僕の知っている有希でないように僕に問うた。僕はそんなことに答えず、ただただ感じていることを叫んだ。「お前は誰だ！有希はどこへ行った！おばあちゃんに何をしたら！」

突然涙が出てきた。生理的に出てきたのか、それとも悲しみで出てきたのか僕にはわからなかった。唯一の友達に何かを裏切られたように感じていたのかもしれない。

「そう大きな声で叫ぶな。有希は俺だ。まあ外見こそ違えど、お前が今まで接してきた有希という人物は俺だ。しかし、残念ながら、俺は人ではない。有希というのも偽りの人、架空の人物だ。俺はあの世の使用人と云ったところだ。この世で死んだ魂をあの世で管理している。」

信じられなかった。何も信じなくなかった。今まで友人と云っていた人があの世の人物で、有希は作られた存在だったなんて。

「事をスムーズに進めるために、お前とお前の家族の記憶は少し書き換えさせてもらった。あまり悪く思うなよ。これも全て仕事なんだ。」

僕は絶句し、頭が真っ白になった。僕の記憶は変えられていた？何が起きているのか。僕は恐怖と悲しみで押しつぶされそうだった。

「ねえ、おばあちゃん。なんだよその角。おばあちゃんもこいつの仲間なのか？何なんだよ！」

急に振られて驚いたのか、それとも僕の形相に恐怖を感じたのか、祖母は肩をびくつとふるわせて話した。

「すまなかつたよ。実は私は亜樹が七才の時に家で独りで死んだんだ。でも私は亜樹に人を信じることの恐ろしさと大切さをどうしても伝えたかつた。そうあの世へ行つて日々思いを重ねていたら、いつのまにかここに來られたんだ。亜樹は最近なぜか來てくれるようになったよね。私はチャンスだと思つて、伝えたいことを話そうと思つて降りてきたのに、今までのように話せなくなつていたのさ。亜樹、私はいつもお前にモノとカガチの話をしただろう。私はおじいさんが亡くなつてから、一歩も家から出なかつた。なぜおじいさんが亡くなつたか知つてゐるかい？その時のお医者さんが間違えて与える薬の量を多くしてしまつたんだ。そのせいとおじいさんがいなくなつたことで私は一層周りが信じられなくなつてね。気づいたら死んでいたんだ。でも亜樹には、どうしても同じ道を歩んでほしくなくてね。どうか人を簡単に信じてほしくなかつた。私が死んだ靈なんて言つたら、亜樹が來なくなつてと思つて、言えなかつたんだ。」

僕は祖父が亡くなつたときから感じていた疑問が全て解けた気がした。祖父のこと、祖母のこと、有希のことすべてがつながら、

そして泣いた。はしたなく、泣き叫んだ。

みんなみんな僕をだましていた。そして僕は何も知らなかつた。今まで感じたことのない孤独感の胸の痛みがそこにはあつた。

「これでわかつただろう、亜樹よ。一人目はカガチ、二人目はモノ。これが私の言いたいことの全てだ。」

祖母は伏し目がちだつた目を見開き僕を見つめた。僕も真っ赤な目で祖母の瞳を見つめ返した。だまされていたことの衝撃と、誰もとがめることのできない現実には打ちひしがれ、涙が止まらなかつた。

「そろそろ時間だ。おい、女。帰るぞ。」

カガチの声が冷たく響く。祖母はあきらめたように下を向いてしたが、なぜか達成感を感じているようにも見えた。二人は起立し、僕は二人を目で捕らえ、力の抜けた足を起こした。

「亜樹。お前がここで見たこと、そして俺たちの記憶は全て消える。決して思い出すことはない。」

それがカガチが発した最後の言葉だつた。その言葉の意味を現実的には考えられなかつた僕は、深く考えていなかつた。

「亜樹よ。だましていたことや、何も言わなかつたことは本当にすまなかつた。ふがいない祖母で本当にすまなかつた。でもね、お前は私の自慢の孫だ。だからこそ私の言つたことを忘れないでほしい。どうか幸せに生きてほしい。」

祖母の真摯な言葉を聞き、多くの感情をこらえながら、これが最後であることを悟つた。そして祖母の瞳をもう一度見た。そこにいた祖母は角の生えた、悲しげな祖母ではなく、凜として美しく、決して人を信じない祖母だつた。

「亜樹！そろそろ起きなさい。もう夕飯できてるわよ。」

午後七時。母の甲高い声が下から響く。僕はベッドからゆっくり体を起こすと、大きなあくびを一つした。リビングのある一階に降りると、おいしそうな唐揚げのにおいがした。

「寝ていたみたのだが、きちんと勉強進んでいるのか？今年は受験生なんだから。」

「わかってるよ。ご飯食べたら、やるよ。」

リビングに入るなり、父が僕に小言を言う。いつもの家族の会話。こざかしい父とおっとりとした母。何の変哲もない日常なのに、なにか大事なことを忘れているような感覚を味わっていた。

次の日、僕はいつもより朝早く起きた。なぜかはわからない。そして何かに誘導されるかのように外へ出て、西側の丘を越え、気づけば祖母の家に着いていた。荒れ果てた庭があり、壁には雑草が張り巡らされて、家の中へ入ろうとしても困難だ。そんな中、庭の奥から何かに呼ばれるような気がした。僕はその気につられて、足元が汚れることにも構わず、雑草をかき分けながら庭の中を進んだ。その気が途切れたところに着くと、白くまぶしい何かがある。僕は目を細ませながらよく見ると、そこには凜とした美しいユリが一輪咲いていた。